

第12章

理気剤 (りきざい)

理気剤とは、理気薬を主体にして気機を疏暢し臓腑機能を調整する方剤である。

気は、全身を周行し昇降出入して四肢百骸・臓腑器官を活動させる。労倦過度・情志失調・飲食不節・寒温不適などは気機の昇降を失調させ、気機鬱結や気逆不降をひきおこす。

気機鬱結に対しては行気によって解鬱散結し、気逆上衝して不降になったときは降気によって降逆平衡するのが、気機失調に対する治法である。気機鬱結と気逆上衝はよく相兼するので、行気と降気を配合して使用することが多い。

理気剤の使用にあたっては、寒熱・虚実と兼挟の有無に注意し、病状に適した薬物の配合を行わなければならない。また、理気薬の多くは芳香辛燥で傷津耗気しやすいので、適度にとどめて過用しないように注意する必要がある。虚弱者・老人・妊婦などには慎重を要する。

第1節 行気剤（こうきざい）

行気剤は気機鬱滞（気滞）に用い、気滞は脾胃気滞と肝気鬱滞の2種に大きく分けられる。

脾胃気滞では、腹満・腹痛・噯気・吞酸・悪心・嘔吐・食欲不振・便秘あるいは下痢などの症状がみられる。

肝気鬱滞（肝鬱気滞）では、主に胸脇部の脹った痛み・疝気痛・月経不順・月経痛などがあらわれる。

使用薬物は、行気通滞・疏肝解鬱の効能をもつ陳皮・厚朴・木香・枳実・香附子・青皮・鬱金・川楝子・小茴香・橘核・烏薬などである。

気滞に兼挟する病変の違いにより組成を変える必要があり、痰湿をとまなうときは化痰祛湿薬を、血瘀をとまなえば活血化瘀薬を、寒あるいは熱をとまなう場合は散寒あるいは清熱薬を、虚証を兼ねるときには補虚薬を、それぞれ配合する。

越鞠丸（えつきくがん）

（別名：芎朮丸）《丹溪心法》

〔組成〕 蒼朮・香附子・川芎・神麴・山梔子各等分

〔用法〕 粉末を水で丸にし1日3回6～9gずつ湯で服用する。約6gずつを水煎服用してもよい。

〔効能〕 行気解鬱

〔主治〕 気鬱・昇降失調

胸が痞えて苦しい・腹が脹って痛む・腐臭のある噯気・吞酸・悪心・嘔吐・胸やけ・食欲不振・消化不良など。

〔病機〕 気・血・痰・火・湿・食の六鬱の軽症である。

気鬱（気滞）による胸膈痞悶・脘腹脹痛、血鬱（血瘀）による胸脇部の固定痛、湿鬱・食鬱（湿滞・食滞）による腹満・噯腐・悪心・嘔吐・消化が悪い・食欲不振、痰火鬱結による胸やけ・吞酸など、昇降失調の症候が生じる。このうち、気・血・火の三鬱は肝の疏泄失調により、湿・痰・食の三鬱は脾の運化失調により生じるもので、実際には肝脾鬱結の結果であり、気鬱が主体であるといえる。

[方 意] 行気解鬱を主体にして、血・痰・火・湿・食の鬱を解消する。

行気解鬱の香附子が主薬で、気機を舒暢させて気鬱を解消する。燥湿健脾の蒼朮は脾運をつよめて湿鬱を除き、消食和中・行気の神麴は食鬱を解し、活血行気の川芎は血鬱を行らせ、清熱除煩の山梔子は火鬱を清除する。全体で、行気を主体にして気・血・湿・食・火の鬱を除き、五鬱を除去し気機を通暢することにより痰鬱を解消するのである。

[参 考]

①《医宗金鑑》には「それ人は気をもつて本となす、気和すればすなわち上下はその度を失わず、運行その機を停めざれば、病は何によりて生ずるや。もし飲食を節せず、寒温は適わず、喜怒に常なく、憂思に度なければ、衝和の気をして昇降の常を失わしめ、もつて胃鬱して飲食を思わず、脾鬱して水穀を消さず、気鬱して胸腹脹満し、血鬱して胸膈刺痛し、湿鬱は痰飲を、火鬱は熱をなし、嘔吐悪心・呑酸吐酸・嘈雜噯気におよび、百病叢生す。故に用うるに香附をもつて気鬱を開き、蒼朮をもつて湿鬱を開き、撫芎をもつて血鬱を開き、山梔をもつて火鬱を清し、神麴をもつて食鬱を消す。これ朱震亨は五鬱の法によりて、変通せしものなり。五葉は相い須け、ともに五鬱を収むるの効あり。然してまさに何鬱の病甚だしきかを問い、すなわちまさに行薬をもつて主となすべし。もし気虚に至れば人参を加え、気痛には木香を加え、鬱甚だしければ鬱金を加え、懶食には穀蘖を加え、脹には厚朴を加え、痞には枳実を加え、嘔痰には姜・夏を加え、火盛には萸・連を加う、すなわちまた証に臨む者の詳審に存すなり」と解説されている。

② 本方は治鬱の大法を具体化したものであり、臨床的に運用するためには六鬱のどれが重いかを判断して、加減を加える必要がある。

気鬱が重ければ香附子を主として木香・枳殻などを加え、血鬱が重いときは川芎を主体にして桃仁・紅花などを配合し、湿鬱が重ければ蒼朮を主にして茯苓・沢瀉などを配合し、食鬱が重いときは神麴を主として麦芽・山楂子などを加え、痰鬱が重度であれば陳皮・半夏・栝楼仁・胆南星などを配合し、火鬱がつけければ山梔子を主体にして黄芩・黄連などを加える。寒証を兼挟するときには乾姜・呉茱萸などを配合する。

厚朴温中湯（こうぼくおんちゅうとう）

《内外傷弁惑論》

[組 成] 厚朴・陳皮各 30g 炙甘草・草豆蔻・茯苓・木香各 15g 乾姜 2g

〔用法〕粗末にし1回15gを生姜と水煎して温服する。1/2～1/3量を生姜と水煎服用してもよい。

〔効能〕行気温中・燥湿除満

〔主治〕寒湿阻滯脾胃

腹満・腹痛・食飲不振・四肢がだるい・舌苔が白滑・脈が沈など。

〔病機〕寒湿の邪による脾胃気滯である。

寒は凝滯し湿は粘滯するので、寒湿が侵犯すると脾胃の気機が渋滯して腹満・腹痛が生じる。寒湿が下注すると泥状～水様便になり、上汨すると稀薄なつばやよだれがみられ、四肢に溢れると手足がだるくなる。舌苔が白滑・脈が沈は、寒湿をあらわす。

〔方意〕行気温中・燥湿により寒湿を除く。

芳香苦温で行気消脹・燥湿除満に働く厚朴が主薬で、辛温で行気寛中・温中散寒・化湿和胃に働く草豆蔻・陳皮・木香・乾姜・生姜が補佐する。茯苓・炙甘草は滲湿健脾・和中の目的で配合されている。全体で温中・行気・散寒・燥湿の効能が得られ、寒湿を除いて脹満疼痛を消除する。

〔参考〕

- ①《成方便読》は「脾胃虚寒，心腹脹満，および秋冬の客寒犯胃，時に疼痛をなすなどの証を治す。それ寒邪の人を傷るや，無形の邪たり，もし有形の痰血食積の互結なくば，すなわちまた痞満をなし嘔吐をなすに過ぎず，即ち疼痛もまた拒按を致さざるなり。故に厚朴の温中散満のものをもって君となす。およそ人の気は，寒を得ればすなわち凝して行くこと遅し，故に木香草蔻の芳香辛烈をもって，脾の臓に入りもって諸氣を行らす。脾は湿を悪む，故に乾姜・陳皮を用いもってこれを燥かし，茯苓をもってこれを滲す。脾は緩を欲す，ゆえに甘草をもってこれを緩む，生姜を加うるは，その温中散逆・除嘔を取るなり。以上の諸薬，みな脾胃に入り，温中をもって可とするのみならず，かつよく散散す。これを用いて貴きはその宜を得るのみ」と解説している。
- ②《方剂心得十講》では本方と理中湯を比較している。その共通点はいずれも主治に健脾燥湿があり，中焦寒盛，嘔吐不食，脘腹冷痛，喜暖喜按，尿清便溏，舌痰苔白，脈滑などの症があることである。その違いは理中湯には人參・白朮があるので，全身倦怠，息切れ，脈が沈細無力あるいは遅緩の症状があるが，厚朴温中湯には厚朴・木香・陳皮・茯苓があるので，重点は脘腹脹満が比較的重く，水様の嘔吐物があり，脈が沈緊あるいは沈弦である点である。人參湯の効能は温中祛寒・補益脾胃，厚朴温中湯の効能は温中理気，燥湿除満であると解説している。

附 方

1. 良附丸（りょうぶがん）《良方集腋》

組成：高良姜・香附子各等分。粉末にし1日3回4.5gずつを服用する。水煎服用してもよい。

効能：温中散寒・行気止痛

主治：肝鬱気滞・寒凝による胃痛・嘔吐・胸脇痛・月経痛など。

温胃散寒・止痛の高良姜と疏肝行気の香附子からなり、行気散寒によって疼痛を止める。

寒凝による痛みには高良姜6g、香附子3gとし、肝鬱による痛みには高良姜3g、香附子6gにするとよい。

金鈴子散（きんれいしさん）

《素問病機気宜保命集》

〔組成〕 川楝子・延胡索各9g

〔用法〕 粉末にし1回9gを酒か湯で服用する。水煎服用してもよい。

〔効能〕 疏肝泄熱・行気止痛

〔主治〕 肝鬱化火

胸脇部の脹った痛み・腹満・腹痛・月経痛などが間欠的に生じ、口が苦い・舌質が紅・舌苔が黄・脈が弦数などを呈する。

〔病機〕 肝鬱気滞・気鬱化火による疼痛である。

肝気が鬱し疏泄が失調して気機と血行が渋滞するために、胸腹脇肋が脹って痛んだり月経痛が生じる。肝気は情志の変化の影響を受けやすいので、情緒の変動にともなって、疼痛が緩解したり増悪したり間欠的に生じる。肝鬱化火しているので、口が苦い・舌質が紅・舌苔が黄・脈が弦数を呈する。

〔方意〕 肝気を疏通し肝火を泄して、気血を調暢する。

主薬は川楝子（金鈴子）で、疏肝行気し気分の熱を泄して止痛する。活血行気の延胡索は血滯を除き止痛して、川楝子を補助する。全体で疏肝泄熱・行気活血・止痛の効能が得られる。

〔参考〕

- ① 本方は気鬱血滯による諸痛に対する基本方剤である。
- ② 月経痛には香附子・丹参・紅花などを、疝気痛には橘核・小茴香・呉茱萸などを配合する。

附 方

1. 玄胡索湯（げんごさくとう）《濟生方》

組成：当帰・延胡索・蒲黄・赤芍・肉桂各 15g，姜黄・乳香・没薬・木香各 9g，炙甘草 7g。粉末 12g を生姜とともに水煎し，食前に温服する。

効能：行気活血・調経止痛

主治：気滞血瘀の疼痛・月経不順。

補血活血・調経の当帰，行気活血・止痛の延胡索・姜黄，活血祛瘀の乳香・没薬・赤芍・蒲黄，行気の木香，通陽の肉桂，調和諸薬の炙甘草からなる。行気活血に働いて温通に偏する。

原著には「婦人室女，七情傷寒し，遂に血と気^{なら}びて，心腹痛^なみを作し，あるいは腰脇に連なり，あるいは背脊に引き，上下攻刺し，甚だしきは搐搦を作さしめ，経候調わざるを治す，ただこれ一切の血気疼痛，併せてこれを服すべし。……吐逆するは半夏，橘紅各半両を加える」とある。

半夏厚朴湯（はんげこうぼくとう）

（別名：大七気湯）《金匱要略》

〔組成〕半夏 9g 厚朴 9g 茯苓 12g 生姜 9g 紫蘇葉 6g

〔用法〕水煎服。

〔効能〕行気解鬱・降逆化痰

〔主治〕痰気鬱結

咽に梗塞感があり嚥下しても喀出してもとれない・胸苦しい・咳嗽・喘鳴・悪心・嘔吐・腹満・舌苔が白膩・脈が弦滑など。

〔病機〕肝気鬱結・肺胃宣降失調による梅核気である。

七情が不暢で肝気が鬱結して疏泄が失調し，気機が停滞して肺気・胃気が宣降できなくなり，津液の布散が障害されて痰を形成し，痰と滞気が結びついて咽喉で結するため，咽に梗塞感があり嚥下しても喀出してもとれない「梅核気」が生じる。肺気が宣降できないので胸苦しい・咳嗽・喘鳴などが，胃気が和降しないので悪心・嘔吐・腹満がみられ，七情不暢によるゆううつ・抑うつなどをともなう。舌苔が白膩・脈が弦滑は，痰湿と気滞を示している。

〔方意〕痰気鬱結・宣降失調であるから，行気開鬱・降逆化痰する必要がある。

化痰散結・降逆和胃の半夏が主薬で，行気解鬱・下気除満の厚朴が補助する。紫蘇葉は芳香行気・寛胸舒肝に，茯苓は滲湿に，生姜は和胃止嘔に働いて，半

夏・厚朴を補佐する。全体で辛散苦降により化痰散結・行気降逆の効能が得られる。

[参 考]

- ① 《金匱要略》には「婦人の咽中、^{しやれん}炙瘻あるがごときは、半夏厚朴湯これを主る」とあり、痰気鬱結の梅核気を「炙瘻（あぶり肉）あるがごとき」と描写している。
 《医宗金鑑》は「咽中に炙瘻あるがごときは、咽中に痰涎あり、炙瘻と同じごとく、これを喀して出でず、これを咽みて下らざるものを謂う、即ち今の梅核気の病なり。この病は七情鬱気より得、凝涎して生ず、故に半夏・厚朴・生姜を用い、辛をもって散結し、苦をもって降逆す、茯苓は半夏を佐け、もって利飲行涎す、紫蘇の芳香をもって、鬱気を宣通す、気を舒し涎を去らしめれば、病は自ずと癒ゆ。この証は男子もまたあり、婦人のみにあらざるなり」と詳細に解説している。
- ② 本方は後世に適応範囲が拡げられており、名称も変化している。
 《三因方》では「大七気湯」と称し、「心腹脹痛し、両脇に傍衝し、上は咽喉を塞ぎ炙瘻あるがごとく、吐咽して下らず」に用いている。
 《易簡方》では「四七湯」と称し、「喜怒恐悲驚の気、痰涎を結成し、状は破絮のごとく、あるいは梅核のごとく、咽喉の間にあり、喀して出でず、咽みて下らず、あるいは中脘痞満し、気は舒快せず、あるいは痰涎壅盛し、上気喘急す、あるいは嘔吐悪心す」に用い、「婦人の^{おそ}悪阻、とくにこれを服すべし」と指摘している。
 《医方口訣集》は「諸気調わずして痛をなし、あるいは手足疼痛し、……あるいは胸膈掣痛して忍ぶべからず、……あるいは小便短澁して淋のごときもの」に使用している。
 《証治要訣》は「癲疾は、けだし痰迷は癲をなし、気結は痰をなし、痰飲はその神識を鬱閉するがゆえなり」とし、癲癩に用いている。
- ③ 本方には加減方がいくつかある。
 四七湯（ししちとう）《和剂局方》は、本方に大棗を加えている。
 四七湯（ししちとう）《直指方》は、本方に香附子・琥珀・炙甘草を加え、疏肝理気・安神・利水通淋の効能をもたせている。
 紫蘇散（しそさん）《聖恵方》は、本方に柴胡・枳殼・檳榔子・肉桂を加え、疏肝利気の効能をつよめている。
- ④ 本方は辛温苦燥の薬物からなるので、痰気鬱結で無熱の場合にのみ適する。